

## &lt; 論文（教科教育学・教育方法学） &gt;

## アクティブ・ラーニングと公民科教育法

山 岡 昭 吉

## 要旨

公民科教育法の授業において、学生による模擬授業実習を主にしたアクティブ・ラーニングの実践報告である。履修学生自ら授業担当分野を選択し、大量の資料からの教材研究を行い、6種の配布プリントを作成し、授業を行わせている。アクティブ・ラーニングの方法が、学生自身の自学自習への定着・成長を目指す目的であるならば、1回の授業実践ではなく、長期にわたる段階的継続的な繰り返しの指導方法が重要になることを、詳細な実践指導報告を通して示したい。

## キーワード

アクティブ・ラーニング、公民科教育法、模擬授業、政治経済、教育実習

## Ⅰ はじめに……指導実践の背景

10年前に本学に着任した時、履修した学生に公民科教育法を指導する時に、多大な困難を感じた。試行錯誤の末に、行った方法が、文部科学省が提唱しているアクティブ・ラーニングに該当するものであった。

アクティブ・ラーニングについて、中央教育審議会（2012年8月28日）の答申では、次のようにいっている。

「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場

を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。

すなわち個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換によって、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ、生涯学び続ける力を修得できるのである。」<sup>(注1)</sup>

この文章からは、特に次の点に注目したい。

- ①個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、
- ②それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換によって、
- ③学生の主体的な学修の体験を重ねてこそ、
- ④生涯学び続ける力を修得できるのである。

ここでは先ず、個々の学生能力を引き出すことを述べている。次に、それを鍛えるために、双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換をして、その次には、学生が主体的な学修の体験を重ねる、と書かれている。最後に、生涯学び続ける力を修得できる、とその目的が述べてある。

文部科学省の『用語集』では、アクティブ・ラーニングについて、次のように定義している。

「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。

発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内部でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」<sup>(注2)</sup>

この文章では、教員による一方向的な講義形式の教育と対比され、学修者の

能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称、と書かれている。

アクティブ・ラーニングについての理論的な考察は、他の研究に委ねたいが、ここで指摘しておきたいことは、ディスカッションなどの手段・教育方法ではなく、アクティブ・ラーニングの最終的な目的である。生涯学び続ける力を修得することが最終目的と思われる記述である。この点は筆者に異論はない。アクティブ・ラーニング、即、ディスカッションやディベートである、というような教育議論を耳にするたびに、違和感を感じているのである。<sup>(注3)</sup>

ここで述べておきたいのは、習熟度上位のグループだけを対象にするのなら、即ディスカッションでも可能であると考えているが、中位や下位グループを対象にするのなら、ディスカッションやディベート、双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換をはかるには、それ以前に、かなり長期の粘り強い指導を個々の生徒・学生にする必要があり、その習熟の状態を確認しつつ、より主体的な学修へと系統的に指導する仕組みを要するということである。

ここでは、10年間、続けてきたアクティブ・ラーニングの一形態としての指導の実践報告を行い、1回の授業実践ではない、長期の継続的段階的な指導によるアクティブ・ラーニングの実践事例を示すことを意図したものである。

## Ⅱ 指導実践・アクティブ・ラーニングの目的

中学校あるいは高等学校における2週間以上の教育実習で、実際に教育現場の教壇に立って、生徒たちの前で授業展開できる最低限の知識と能力を公民科教育法の履修学生に培う指導に注力してきた。そのためには、公民科の内容を端から端までを一方的に講義していく方法では、目的を達成できないと考えた。公民科教育法を履修した学生が、能動的積極的主体的に自発的に取り組むことが不可欠であり、アクティブ・ラーニングの方法で、かつ長期間の活用が必要であると考えたからである。また、彼らの消極性の根源と感じた、自信の無さを克服すべく、最終的には、真の自信をつけ、以後何事にも積極的に取り組め

るようにする、生涯学び続ける力を修得させることが、この指導の実践の目的であった。

### Ⅲ 先行研究

アクティブ・ラーニングに関する教職課程の指導ならびに教科教育法の指導での実践面の先行研究は、ほとんど無いに等しい状況である。このため、筆者の10年間の試行錯誤の指導実践報告をここにさせていただく。指導実践の一部でも活用・実践していただくために、実践したアクティブ・ラーニングの内容を具体的に細かく、ここに報告をさせていただきたい。

## Ⅳ 指導実践の内容……アクティブ・ラーニングの内容

### Ⅳ-1 指導上の留意点

知識理解重視の指導方法ではなく、実技実習重視の指導方法、アクティブ・ラーニングの手法を採った。知識等を理解するだけではなく、身につけ、使い、使いこなす段階までを習得させることを指導の目標にした、一連の指導を行った。段階的に繰り返しながら、習得していく仕組みを中心にした指導を行った。そのために、一回の授業におけるアクティブ・ラーニングの試みではなく、公民科教育法の半期2単位の授業全体を通したアクティブ・ラーニングの試みをここに報告する。

模擬授業実習において想定している学級の生徒たちは、習熟度の上位レベル20%、中位レベル60%、下位レベル20%という、一般的平均的な人数構成の生徒たちを前提とした。特に中位や下位レベルの生徒たちも授業に参加しやすい授業を目標にした。

そのためには、教科内容を広く、深く理解しているだけではなく、下位の生徒にも理解できるように、教科内容を解体し、下位の生徒レベルまで意識を降ろして、わかりやすく解説する能力が必要になる。受験校では、前者の能力が高い教員は多いが後者の能力をも保持している教員は少ない。その後者の能力

を育成することが急務であると考えている。

中位や下位の生徒からの信頼が得られる授業運営能力を、知識理解レベルではなく、身につけさせることを目指した。中位や下位レベルの生徒たちに真剣に向かう姿勢は、大学在学中に身につける必要があり、出来るだけ教育実習の前に身につけることが、教育実習校の生徒たちにも、より望ましいことと考えている。

## IV－2 指導実践の内容

模擬授業実習指導を主体とした公民科教育法の授業であり、その中核は、4段階のらせん的繰り返し指導システム<sup>(注4)</sup>である。履修している学生は、全員が1人50分、4回（4段階）の模擬授業実習を行う。

公民科教育法の授業時間は、ほとんど毎時、履修学生による模擬授業実習になり、90分の内、前半の50分が模擬授業実習で、後半の40分が模擬授業実習後講評になっている。模擬授業実習の準備としての教材研究は、授業時間以外で学生各自が行うことを原則としている。ただし、当初は、授業時間内で教材研究の仕方、調べ方、教材の解体の仕方、再構成の仕方などを、実習する学生各自の模擬授業担当分野に合わせて指導を行う。この最初の指導の段階は、学生の不安を除くためと自信をつけさせるためには極めて重要である。先の①の「個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し」に該当し、最初は、仲間意識を作るために、場所は同じところで学ばせるが、学生個々に合わせて、教材研究の仕方などを個別に指導していく。最初からグループだと、個々人の本当の実力がわからないことと、学生本人からはどこまでが自分の力・自力なのかかわからず、自信をつけることができない。

ここでは、4段階の指導の内容を、指導の重点、模擬授業実習者、模擬授業観察実習者、模擬授業実習後講評の4つの視点で、述べたい。模擬授業の段階的指導の概要については、次の「表・模擬授業段階的指導表」を参照のこと。

表 模擬授業段階的指導表

	1. 第1段階	2. 第2段階	3. 第3段階	4. 第4段階
-1 指導の重点	配布プリントの作成を通じた教材研究を重視する	教材研究から授業展開に重点を移行させる	教材研究と授業展開の基礎の完成。生徒対応の高度化を目標とする	発問誘導型授業運営を目標として努力させる
-2 模擬授業実習者	6種の配布プリントの作成に全力をつくす	授業展開に注力する	生徒対応に注力する	発問誘導型授業を試みる
-2-1 教材研究の側面	生徒目線の配布プリントを目指す	図解に利害損得などの当事者意識を入れる	図解プリントが具体的に身近な表現を意識的に活用する	配布プリントのE 実際のデータ、F 解決すべき課題の準備努力の点検
-2-2 授業展開の側面	50分以上の授業を行う	配布プリント、板書、口頭説明の3点一致を目指す	発問型授業展開を目標とする	板書の書き方、整理の仕方により意識が向いている発問型授業を行う
-2-2-1 板書	図解板書に注力する	板書活用の基礎を意識した板書を行う	板書活用の基礎を身につける。生徒に配慮した板書を行う	消極的生徒対応と板書の確認を素早く行う
-2-2-2 口頭説明等	発声の仕方に注意	生徒の生活目線まで内容を解体してわかり易く説明する	作業指示を基礎に、発問を適宜に行い返答を板書し誘導する	ヤマ場を意識した口頭説明を行い、口頭説明中に板書確認を行う
-2-2-3 構成・流れ・ヤマ場・ポイント等	教材内容のヤマ場を確認する	ヤマ場が中央に位置するようにする	プリントDの練習問題を解かせる時間配分の余裕をもたせる	ヤマ場と重要度を意識し配布プリントE、Fの授業時間内活用を目指す
-2-3 生徒対応の側面	作業指示法に注力する	積極的生徒対応の発問の基礎レベルに注力する	面白い答えとして対応する方法を行う	公民科の授業が面白い、興味を引き出す面白い生徒対応を行う
-3 模擬授業観察実習者	可能な限り広く深く見て、気づいた点を記入する	プリント・板書・説明の3点一致、作業指示、ヤマ場に注目する	広く網羅的に総点検できているか、観察実習者が点検される	観察実習者自身が代替案としての自分の展開案を提示させる
-4 模擬授業実習後講評	消極的生徒対応や指示3回、板書、ヤマ場について重点的に指導する	次回の事前指導として生徒の理解から、生徒の納得へ、重点を移す指導をする	講評後討論させる。次回の最終回の準備として各自の課題の総点検を指示する	展開や方法など討論させる。最終段階として、各自の総点検と今後の課題など確認し共有する

## 1 第1段階

### 1-1 指導の重点

第1段階が極めて重要であり、模擬授業実習の基礎固めをする段階と位置付けている。ここでは、A～Fの6種類の配布プリントを生徒目線で作成することが第1目標になる。そのため、学生の模擬授業実習後に、板書をはじめとする授業運営方法を指導するが、この段階の模擬授業実習においては、授業運営能力を模擬授業実習生の努力評価の対象にはしない。この点は極めて重要である。

4段階の指導の内の第1段階では、努力目標を主に教材研究に絞り、努力をしやすいようにして効果を上げる。最初の第1段階では模擬授業実習生のメンタル面には十分な配慮をすることが重要である。いきなり学生たちの前の模擬授業実習で恥をかかすことは学習意欲を大きく削ぐことになる。この段階で授業運営能力まで評価範囲を広げて、厳しい指摘や批判を行うことは避けるべきである。一定の努力の成果が出た頃、第2段階以降で行うべきことである。

公民科教育法でも、公民科3科目の内、一番重視するのは、「政治経済」であり、その内の経済の分野である。第1段階と第2段階では原則として、全員に経済の分野で模擬授業を行わせる。本学の教職課程は経済学部経済学科に所属しており、本学の学生が教育実習に行く場合、公民科の教科のうち、「現代社会」よりも「政治経済」の経済の分野を担当する場合が多いことが大きな理由であるが、加えて、経済分野の仕組みなどをわかりやすくするための努力をかなり必要とされる科目と考えていることがあげられる。法律の条文のように、文章をきちんと解体し、理解しなければ、わかりやすく教えることが難しい分野であり、学生の読解力、教材の解体力を身につけさせるのに良い、と判断したことも理由の一つである。そして生徒たちの生活地点（家計）への教育内容の展開ができる分野である点も理由としてあげられる。

この第一段階で最も重視するのは、配布プリントの作成を通じて、教材研究能力（情報大量収集、情報読解、比較検討、生徒目線からの分析、プリント作成）を培うことであるとともに、生徒目線とは何なのか<sup>(注5)</sup>を理解させるこ

とである。

模擬授業実習前に模擬授業準備状況、特に配布プリントの内容を点検しながら、授業展開の内容の予定を確認し、授業展開について助言をしていく。

## 1-2 模擬授業実習者

ここでは、教材研究の側面、授業展開の側面、生徒対応の側面の大きく3点に分けて述べたい。

### 1-2-1 教材研究の側面

実習者である履修学生の教材研究の内容は、作成された配布プリントの内容を通して理解度、解体度などを確認しながら、プリント作成を指導する。従って、教材研究の結果として作成された配布プリントの内容によっては教材研究不十分として判断され、模擬授業実習は延期される場合がある。実際には、第1段階では特にその場合が多いので、日程的に早めに実習担当を割り当てる。当初の日程割り当てと変わり、実習の担当者が前後する場合が多い。教える内容によって、かなり時間がかかる場合もあるので、担当予定日程が前後する場合があることは事前に伝えておく。

次の「配布プリント作成要領」は、模擬授業実習を行う学生が常に参考にするために、事前に配っておく資料である。

## 配布プリント作成要領

授業実習時、配布用プリントの内容……各項目（A～F）1枚以上

### 1. 配布プリントの種類

#### A 教科書該当箇所：

授業実習する教育内容に該当する教科書部分を人数分（受講者＋教員）をコピーする。

#### B 説明・解説文：（流れ・仕組み）＋（用語解説）等

全体の仕組み、関係、流れ、ポイントなどをわかりやすく示す。



目標は、「(専門用語ではなく)自分の言葉で、簡潔に」。

「なぜ、その項目があるのか、学ぶ必要があるのか」。

「要するに、どういうことか」、「ポイントを要約すると……」。

基礎 1 : 教科書の文章・説明通り

基礎 2 : 教科書の文章・説明を越えて

応用 1 : 複合的な視点で説明。その項目・範囲を越えたもの

応用 2 : 現実問題を想定した説明・・・E・F

応用 3 : 自分の言葉で、学ぶ必要性とポイントを要約

C 図解：仕組み、関係、流れなど。

基礎 1 : 教科書の図解通り

基礎 2 : 教科書の図解を越えて

応用 1 : 複合的図解

応用 2 : 現実問題を想定した図解・・・E・F

D 練習問題：(C 図解の穴埋め問題)+(流れ・仕組み問題)+(用語解説問題)等

基礎 1 : 教科書の文言通り

基礎 2 : 教科書の文言を越えて

応用 1 : 複合的問題

応用 2 : 現実問題を想定した問題・・・E・F

E データ 1 : 現実：今の実際の出来事・数値

今現在の現実的な状況を具体的に示す。

F データ 2 : 課題：解決すべき課題、今、問題になっていること。等

今、問題になっている解決すべき課題。

G 諸説・諸見解

原因・対策などに対する種々な見解を示す。

H 選択・自説

自分の考えを示す。

## 2. 準備の手順

- (1) テーマを決める。……主に図解を中心にする。
- (2) テーマに関係する関係資料の頁を、図解中心にコピーをする。……教科書、資料集、問題集など、多数。
- (3) 教科書の文章を熟読し、段階的にテーマ内容を解体する。……かみくだいて段階的にわかりやすくする。
- (4) 段階的に、図解や文章を作成、再構成する。……Cの完成
- (5) D、Bを作成
- (6) E、Fを作成

次に、簡単に6種類の配布プリントの要点を述べ、模擬授業実習者に作成させる時の指導上の留意点について触れておきたい。

A教科書の該当箇所

B説明・解説文……流れ・仕組み、用語解説など

C図解……仕組み、関係性、流れなど

D練習問題……C図解の穴埋め問題、流れ・仕組み問題、用語解説問題など

Eデータ1……実際のデータ

Fデータ2……解決すべき課題

この6種類の配布プリントを模擬授業実習のたびに、毎回作成することによって、教材研究すべき分野・領域がわかるとともに、資料の準備から作成までが早く処理できるようになる。そのため、教育実習の時に、授業実習の対象クラスの生徒の上位中位下位の人数構成に対して、柔軟に対応した授業を行うために、B～Fまでの資料の配置や軽重・比重などによって、配布プリントの内容や構成を変えることができる。プリントCは図解であり、このCを重点的に扱う授業の場合には、習熟度中位と下位グループを重視したものになる。それに比べて、プリントEとFを重点的に扱う授業の場合には、指導内容の基本的な知識を十分理解した上での現実的な課題を考えることに多くの時間を使う

ことになるため、習熟度が上位のグループを配慮したものとなる。

最初には、経済の分野で教科書のどこを担当するのかについて、学生各自で調べ、選択し、決定させる。どこを担当するかを調べる段階から、調べる能力を育てる方向で指導している。調べる対象の資料を、高校の「政治経済」の教科書から、参考書、資料集、問題集からはじめて、「現代社会」の教科書、資料集、そして、中学の社会科の公民的分野の教科書、資料集などについても、調べさせ、大量の資料を検討させる。<sup>(注6)</sup>

当初は、解説のための図解を中心に調べさせる。その場合に、大量の教科書・資料集などを詳細に検討することを求めている。最低でも、10種以上の同じ箇所・範囲の図解を検討させる。どの図が最もわかりやすいものか、という判断基準で調べさせる。

図解を中心にして、生徒にとってわかりやすい図解を探し、数種を提示させ、それを解体して、学生自らが手を加えた図解を作成させる。この方法は、学生自身の理解力・読解力・解体力が明確にわかる方法であるとともに、図解という客観的な形になるため、読解や解体が不十分であるところも明確になり、教材研究の指導がしやすい。

往々にして、概念を概念で理解しただけでわかった気になっている学生が多い。それでは、模擬授業の対象として想定している高校生の目線に授業内容を構成することは難しく、高校生の生活目線に合わせた生活言葉で経済を解説することはさらに困難になる。中位・下位グループへの指導を目標にする場合には、概念を解体し、高校生の生活目線で再構成する必要がある。

大量の教科書・資料集などを自主的に調べるとともに、そこにある図解を中心にして、自主的主体的に図解に手を加え、あるいは全面的に再構成し、図解ならびに配布プリントを作成していくことは、かなりの自主性積極性を必要とするとともに、理解ならびに資料の読解力・解体力が、確実に身につく方法であるといえる。<sup>(注7)</sup>

このことを通して、教科書や資料集は教科書会社によって、編集の仕方や図

解の取扱いなどが異なることに気づかせていくとともに、生徒目線でわかりやすい図解・文章とは何か、という視点に注目させる。また、ほぼすべての教科書は、生徒がいる地点である家計・家庭までの説明はしていないことに気づかせる。財政・政府の視点から企業の視点まで説明してあるのがほとんどである。そこを家計・家庭まで具体的事実を明示し、家庭生活の視点を含めて解説することを求める。

第1段階では、授業内容の理解に参考となるモノ、基本的には具体的なモノ・商品などを用意することが望ましいことを伝えているが、強要はしない<sup>(注8)</sup>。提示物などを考えさせることは、模擬授業実習者である学生に生徒目線を育てるのに有効であると考えている。

### 1-2-2 授業展開の側面

本来は、授業展開では、配布プリントは重要な要素だが、配布プリントは、先の1-2-1教材研究の側面、で扱うため、ここでは配布プリント以外の要素について、板書、口頭説明等、構成・流れ・ヤマ場・ポイント等の3点に分けて取り扱う。

#### 1-2-2-1 板書

第1段階では、授業展開がきちんとできているかは問わず、評価の対象としない。だが、板書活用の基礎を、模擬授業実習後の講評時に第2段階のための準備、目標設定として指導する。その板書活用の基礎の一部を次に述べる。

#### 【板書活用の基礎】

特に中位や下位レベルの生徒たちも授業に参加しやすい模擬授業を目標にしているため、板書もその目標のために活用する配慮が必要となる。

##### 1) 三面板書法の基礎

黒板の板書を左側・中央・右側の三部構成と見立て、書き方を仕分けし、ルールづける。

左側……黒板の左側が最も重要で、授業展開の道しるべとして位置づける。

主に目次の役割で教科書等の頁や、配布プリントの頁などをこの左側の黒板に板書する。授業の迷子になり易い、習熟度が中位や下位レベルの生徒たちにとって、特に重要である<sup>(注9)</sup>。迷子状態から授業に意識が戻ってこれるように、授業内容の場所、頁などをこの黒板の左側で明示する。この左側の案内板のような板書は極力消さないようにする。

中央……左側とは異なり、主に説明文・解説文や図解を板書する。

右側……説明文や図解や軽いメモなどを板書する。

発問の返答などのメモやメモ的な図解は、決して左側には板書すべきではない。

## 2) 図解板書法

図解は、大枠としては大きく描く。説明の中心となるモノの流れは、上から下へ、左から右に、流れるように図を描く。経済的な力関係では力が強い方を上に位置づける。

左から右にモノを流すのが原則にする以上、自然と、家計は右側に位置づけられる。経済のどのような図解でも、出来るだけ、生徒たちがいる家計まで、図解を描き、生徒たちの生活に経済の説明を結びつける。板書の図解そのものは、出来るだけ、C図解の配布プリントの図解と同じ様に描くように指導する。<sup>(注10)</sup>

## 3) 板書の消し方

板書は、中位や下位レベルの生徒たちには極めて重要である。口頭説明についていけない場合が多く、その場合には板書のみが頼りになるからである。その意味で、板書は生徒たちとの重要な架け橋である。

自信が無い習熟度の中位や下位レベルの生徒たちにとって、板書を写すことは彼らなりの極めて重要な授業参加努力である。そのため、写す機会を一方的に奪うことは避けなければならない。板書を消す場合に黒板消しを斜めに動かして消すことを絶対にしてはならない。一行ずつ消すことが原則である。加えて、消す時には黒板だけを見るべきではなく、振り返りながら、必ず生徒たちの動きを見るべきである。中位や下位レベルの生徒は、自信がないために、何

でも写そうとすることに加えて、写す速さが遅い場合が多い。

彼らの反応を見ながら、どの行まで消すのか、その都度判断するべきである。どうしても速く消し、授業の先を急ぐ場合には、その旨、きちんと生徒たちに伝えるべきである。生徒たちの動きに合わせた対応と会話も生徒たちとの重要なコミュニケーションの一つであることを忘れるべきではない。真剣に教える姿勢を、生徒たちに伝えることも重要である。生徒たちとの信頼関係なしに、密度の濃い高度な授業を行うことは難しい。

ここのところをきちんと指摘し、指導することによって、教育実習時の生徒たちへの真摯な姿勢を培うことは、極めて重要なことと考えている。このような指導を積み重ねながら、学生の過去の記憶、授業を聴いていた聴く側の生徒だった頃の傾聴度が低かったことや授業運営が上手であった先生方の手法などを思い出させつつ、生徒目線を育てていくことは必要なことである。

#### 4) チョークの持ち方

チョークの持ち方については、第1段階の模擬授業で自分なりに板書させた後に、別の授業時間で、学生全員で、黒板に向かい、板書させる。学生同士で、議論させると、板書の改善効果が大きい。速く長く続けて板書しても疲れない持ち方を、お互いに検討しながら模索させる。手首を柔らかく、かつチョークも柔らかく握りながら、素早く書いていく持ち方をいろいろと試みさせる。30分もかからないで、速くきれいな読みやすい字で板書していける持ち方を習得する学生もいる。驚くことにいきなり字がきれいになるとともに、書くのも速くなるのである。英会話学習において、基礎としての発音を無視できないように、生徒に読みやすい板書、ということにおいては、チョークの持ち方の指導を無視することはできないと考えている。

#### 1-2-2-2 □頭説明等

第1段階では、事前の指導としては、50分間以上の授業を行うことと、教科書をなぞるような逐語解釈的な展開はしないように指導する。だが、内容的に口頭説明等がわかりやすかったか、などは問わない。講評時に、第2段階への

目標の設定として、実習者個々に合わせて、発声の仕方から確認・指導していく。

### 1－2－2－3 構成・流れ・ヤマ場・ポイント等

第1段階では、事前の教材研究指導の段階で、模擬授業を行う教材内容のヤマ場と授業の流れを確認しておく。これができていない場合には、教材研究不十分として、模擬授業の実習を後日に延ばす。準備ができて、実際に実習した時に想定通りにはうまくいかない場合には、今後の努力目標として、講評の中で指摘するが、当初の第1段階の目標の教材研究は達成していることを学生全員の前で言う。この努力を認めることは、今の学生気質を考え、今の学生を育てていく上で、重要なことと考えている。

第1段階での模擬授業の事前指導では、50分の制限時間内に授業が終了してしまうことは、教材研究不足と判断されるため、してはいけないこととして指導している。このため、制限時間を超えて授業を行う場合の、延長5分以内にまとめる方法や、制限時間内の終了に近い場合の、復習確認の方法や、練習問題、宿題の出し方などをこの段階で指導する。

### 1－2－3 生徒対応の側面

第1段階では、積極的な生徒対応の側面（発問法、誘導法）については、模擬授業への指摘としての講評において、重点を置かない。消極的な生徒対応（作業指示法、音読等）については、第2段階への準備として講評時に触れる。ここでは消極的な生徒対応かつ生徒全体への一括対応に関して多く触れる。最初の段階で、生徒対応の「べからず集」として、してはいけない言動について、具体的事例による問いかけを行いながら指導する。第1段階で、諸種の授業運営能力を培う過程で、授業運営の全てのベースになる、教壇に立つ心構えとして、生徒目線ならびに生徒生活目線の確立を目指す。

第2段階の模擬授業実習後の講評時の指導として、ここでは、生徒対応の基礎としての消極的な生徒対応について述べる。次の第2段階の授業運営の予習として、習得すべく、意識的に実践させる必要があるのは、作業指示法である。

生徒たちが授業に注力かつ参加しやすい作業指示手法としてのアンダーライ

ン、テキストに記号などの記入、特殊記号などのノート転写指示、音読などである。集中力が低下している現在の生徒には、その都度、具体的な細かい指示を行い、授業に引きつけておく必要がある。授業運営法の基礎として、意識的に身につけ、活用すべき内容である。

この場合に注意すべきことは、作業等の指示についても、忘れてはいけない重要なことがある。指示は必ず3回繰り返して行い、1回目と2回目は同じ表現でも良いが、3回目は、別の表現にする、ということである。中位・下位のグループを対象にする場合には必須の要件であり、指示ばかりではなく、重要なことを強調する場合でも、この配慮は不可欠なことである。これらのことが身について活用できているかどうか、という点でも、生徒目線が身についているかがわかるため、努力評価のポイントとして扱われる。

### 1-3 模擬授業観察実習者

観察実習ノート<sup>(注11)</sup>を用意し、その観察実習ノートにある各種の欄に、授業で気づいた項目を系統的に記入させる。この観察実習ノートへの記入を、模擬授業実習のたびに繰り返すことによって、きちんと見る努力、聴く努力を養うとともに、気づきから観点の定着へと成長させていく。この授業観察の観点の定着は、自己点検の参考点になるため、授業運営力をつける上で重要である。記入欄はいろいろとあるが、そのうちで特に重視している項目は、「○」「×」「⇒」などの各欄である。「○」の記入欄は、良かった点を書く欄である。同様にして「×」は、良くない点、改善を要する点であり、「⇒」は、改善を要する点を改善していく具体的な方法について書く欄である。

可能な限り、広く深く見て、気づいた点を記入させる。最初は、記入することが少なくても、講評時に評価する点や努力目標などの点を解説するため、段々、記入内容が多く深くなっていく。他人事の批判ではなく、自分自ら今後、実体験する可能性が高いため、真剣に観察し記入するようになる。



## 1-4 模擬授業実習後講評

模擬授業の後に、講評を行うが、その中に、授業そのものの講評に加えて、次の模擬授業のための努力目標としての諸技術を教える。授業そのものの講評は、模擬授業を実習した学生、模擬授業実習者には改善への指摘になるが、同時に、模擬授業を受けた学生、模擬授業観察実習者にとって、観察すべき観点が明示されるので、今後の観察ノートの記入時に参考にするためと、自らの模擬授業実習の努力目標として参考にするためでもある。

第1段階の模擬授業実習前では、教材研究に集中させるために、授業運営について細かい指示はしていない。第1段階の模擬授業が終了した後の講評においては、積極的に授業運営の各種の技術や配慮事項を指導する。あくまでも、教材研究が第一であるが、そこだけで完結し、終わってしまうのではない。教材研究はあくまでもスタート、出発点である。<sup>(注12)</sup>

具体的な指導内容としては、1-2-2 授業展開の側面、1-2-3 生徒対応の側面において、先に述べたものになる。

## 2 第2段階

### 2-1 指導の重点

第1段階では、授業運営については、ほとんど要求はしないが、第2段階では、授業運営について、基礎的なことを要求するとともに指摘することが多くなる。ヤマ場としての解説においては特に、配布プリントの図解などの解説部分、板書、口頭説明の3点の一致、統一が求められる。この3点が一致していることは、生徒目線からは極めて重要である。一致していないと生徒に余分な努力、推定、配慮を求めることになり、結果として誤解や余分な先入観を生じさせることになる。この基本的なことは、授業運営技術を身につける早い段階で意識させる必要がある。

## 2-2 模擬授業実習者

配布プリントの作成方法については、第1段階で基礎ができて、作成の要領は飲み込んでいるので、第2段階では教材研究の側面から、授業展開の側面に実習者の努力の重点が移動していく。

### 2-2-1 教材研究の側面

理解させる図解において、登場人物・組織などの立場、利害損得関係に具体的な当事者意識が入っているか、がこの第2段階では重要な要求事項になる。配布プリントの以外の提示物を考えさせる場合には生徒生活目線で、どのようなものを準備するのか、を考えると、提示物の見せ方にも配慮することが求められる。

### 2-2-2 授業展開の側面

授業展開では、先述した、配布プリントの解説部分、板書、口頭説明の3点の一致、統一が求められる。

#### 2-2-2-1 板書

3面板書法などの基礎的な技術が実行できているか、が求められる。図解の板書が読みやすくわかりやすいことがこの段階で要求される。

#### 2-2-2-2 口頭説明等

第1段階では、教材研究が重点項目だったので、口頭説明等については厳しく要求されていないが、この第2段階では、途切れ途切れの口頭説明や文章を順序良く羅列するごとく説明するのではなく、生徒の生活目線まで内容を解体してわかりやすく解説できていること、が求められている。この段階では基礎的授業運営技術として、作業指示の出し方、活用の仕方を授業で実践的に試して身につけていくことが重要視される。<sup>(注13)</sup>

#### 2-2-2-3 構成・流れ・ヤマ場・ポイント等

第2段階では、ヤマ場の内容が、板書配分でも、説明配分でも、時間配分でも、中央に位置して授業運営しているのか、が求められる。指導内容の軽重のレイティングを明示することもここで要求される。

### 2-2-3 生徒対応の側面

消極的生徒対応が適宜活用できているか、回数や展開の間などを実習者である学生に求めるが、目標として指摘するだけで、習得レベルとしての厳しい指導しない。

積極的生徒対応としての発問では、基礎的なレベルとして、Yes No やプリントの空欄穴埋めの用語を問うことをこの段階では求める。講評時では、発問の返答へのフォローの仕方各種について、具体的な事例で指導する。基本的なフォローの立場は、発問に応えた生徒を生徒たちの前で公然と恥をかかせない、という心構えを徹底して指導する。中位・下位レベルの生徒たちを主な対象として授業運営を行う上で、極めて重要なことと考えている。

### 2-3 模擬授業観察実習者

第1段階での、可能な限り、広く深く見て、気づいた点を記入させることから、進めて、配布プリントの図解、板書図解、口頭説明の3つがきちんと統合するように運営されていたか、わかりやすい工夫があったか、消極的生徒対応（作業指示等）やヤマ場が適確であったか、などに注目させる。

### 2-4 模擬授業実習後講評

模擬授業の講評に加えて、次回の第3段階の課題、事前指導を行う。生徒に理解させることから、納得させることへ、授業運営技術を深めることを目指させる。基礎的な技術は、第3段階では実際に活用できていることが要求されることを伝える。第2段階からは、学生の気づきを言わせる。

## 3 第3段階

### 3-1 指導の重点

この第3段階では、基礎的な技術のほとんどのことが身につけていることが求められるが、実際には、基礎的な技術全てを3回目で活用できるようになる

のは難しい。そのためこの段階では、得意なこと、不得意のことを自覚して授業運営を行わせる。

### 3-2 模擬授業実習者

第3段階目になると、授業実習者である学生は、配布プリント作成を通した教材研究には十分慣れてきており、要領よく手際よく、配布プリントを作成する。模擬授業準備の重点が、授業展開や時間配分へと移っていく。

#### 3-2-1 教材研究の側面

C図解のプリントにおいて、図解が現実社会的にリアルに構成され、具体的に身近な表現を意識的に活用しているか、が求められる。例としては、市中銀行とあれば、生徒にとって身近な当該地域にある銀行支店名を使用したり、現金・資金などなら、具体的な金額を表示するとともに、当事者の利害損得が伝わるように説明をしていく。

#### 3-2-2 授業展開の側面

この段階では、発問型授業展開が目標となる。

##### 3-2-2-1 板書

板書にかかわる生徒への配慮も求められる。生徒が板書を写す時間を与えているのか、内容の重要度を板書で明示しているのか、板書と配布プリントの連携なども考慮に入れているのか、などが求められる。

##### 3-2-2-2 口頭説明等

一方的で単調な口頭説明ではなく、口頭説明の途中で、生徒たちへの作業指示を基礎にして、発問を適宜行い、その返答を黒板右側に板書き、発問で生徒たちを授業に誘導しながら授業展開することが目標になる。この段階では、授業の中心となる図解解説などの重要なことは完璧に近いことが求められる。

##### 3-2-2-3 構成・流れ・ヤマ場・ポイント等

ここでは、プリントのD練習問題を、多少でも生徒に解かせるだけの時間配分を目標にする。

### 3-2-3 生徒対応の側面

基礎的な技術が定着してきたこの段階では、下位グループ対象の方法を紹介する。特に、発問に対する返答が正解であることは少ないため、そのための対応・フォローに配慮する必要がある。正解としての「○」ではなく、誤答としての「X」でもなく、どちらでも無い対応の仕方である、「△」である。下位グループへの発問は、その返答への対応によっては、公然と生徒に恥をかかす可能性が大である。それを避けるために、誤答でも、「X」の誤答とせず、どちらでも無い「△」として、よし悪しではなく、面白い答えとして、対応する方法を行わせる。この段階で身につける努力をさせる。

### 3-3 模擬授業観察実習者

観察実習者としては、この段階では授業実習者の授業運営に対して、広く網羅的に総点検できていることが求められるため、観察実習者が提出した観察実習ノートに対する厳しい点検・確認を行う。

「○」欄の記入が少ない場合は、良い点を発見する能力が低いことになるため、後々の生徒対応で問題になる。授業実習者の良い点を、姿勢・態度、発声、目配り、書き方、表情など、授業運営に直接かかわらないようなことでも、詳細に観察し、気づいたところを評価するように指導する。教育実習時の生徒対応に活用できるレベルまで観察力・気づきの力を育てるように指導する。

### 3-4 模擬授業実習後講評

講評後、各自気づいた点などを指摘させ、改善点・改善方法などに絞って討論させる。次回が最後の第4段階目になるため、学生が各自の課題を総点検しておくことを模擬授業準備として、ここで指示する。

## 4 第4段階

### 4-1 指導の重点

この段階では、基礎技術の定着を超えた、自分の課題への挑戦が求められる。

### 4-2 模擬授業実習者

模擬授業実習者である学生は、最後の段階として、緊張して臨んでいる。

#### 4-2-1 教材研究の側面

配布プリントのEデータ1・実際のデータ、Fデータ2・解決すべき課題、の内容に、より関心を持たせる資料を提供しているか、が求められる。

#### 4-2-2 授業展開の側面

この最終段階では、発問型授業が目標となる。発問からの誘導的授業運営である。発問を中心にした授業になるが、その分、口頭説明中心になりがちになるので、板書の書き方、整理の仕方に意識を向けることが重要になる。

##### 4-2-2-1 板書

最終点検、総括として、板書の基本を授業運営中に確認することが求められる。そのためには、消極的生徒対応がきちんと実行できていることが必要である。消極的生徒対応において生徒が、アンダーラインや音読などの指示に対応している間に、素早く確認することを意識して行わせる。

##### 4-2-2-2 口頭説明等

この段階では、単調に授業運営するのではなく、特に授業のヤマ場をヤマ場として意識的に展開することが求められるために、口頭説明においても、ヤマ場を意識して行わせる。同時に板書がヤマ場としての書き方、整理、ポイント明示がしてあるのか、を口頭説明中に確認する技術を身につけるように指導する。

##### 4-2-2-4 構成・流れ・ヤマ場・ポイント等

ヤマ場を意識することは当然であるが、それ以外の授業内容の重要度なども意識的に明示することが求められる。配布プリント中のE実際のデータ、F現在の社会的課題などを授業時間内の最後の時間で簡単に触れることを目標にする。プ

リントEとFは、上位者グループを主に対象にして、授業内容に興味関心を持った時に、自学自習してもらうための刺激剤の資料として位置づけている。

#### 4-2-3 生徒対応の側面

この段階では、単に教科内容をわかりやすく、授業を展開するだけではなく、結果として、公民科の授業が面白い、興味が湧き自学自習したくなる方向に展開するために、終始、明るい生徒対応を心がけることが求められる。

#### 4-3 模擬授業実習観察者

前の第3段階における総点検の次の段階として、自分なら、授業のヤマ場をどうするのか、授業をどう展開するのか、等々と代替案を観察者に考えさせる。

#### 4-4 模擬授業実習後講評

講評の後に、展開や方法など、気づいた点、改善点などを現場実践のレベルで討論させる。模擬授業実習の最終段階であるので、実習者各自の総点検と、各自の良い点、今後の課題などを、履修生共通のものとして共有できる形で指摘し、確認したのち、自らの目標とする授業展開などについて討論させる。

### V おわりに

アクティブ・ラーニングの実践において、1回の授業実践ではない、授業形態を提示した。アクティブ・ラーニングの方法が、学生が生涯学び続ける力を修得すること、が最終目的であるならば、いきなりのディスカッションや1回の授業実践とその前後の指導だけでは不十分ではなかろうか。公民科教育法の授業時間で半期にわたって、模擬授業実習を軸にして実践してきた、アクティブ・ラーニングの段階的かつ系統的な指導方法について検討することに意義があるのではないのか、と考え、指導の詳細を示した次第である。

今後の課題としては、本学の公民科教育法の履修開始学年が1・2年生でなく3年生という履修条件のため、公民科教育法履修学生が少なくなることから、

1人50分の模擬授業実習を各自4回行えるわけであるが、その分、学生が少ないため、第3段階・第4段階で目指している授業運営上の技術である生徒対応技術を履修学生が十分身につけることが難しい。今後は、学内外の公開模擬授業実習などの検討を進めているところである。また、実際の教育実習において、かなり重要になるのが、生徒目線の獲得ならびに生徒目線からの各種の指導技術であると考えている。いかに知識があっても、大学のゼミ論発表レベルの知識開示型ワンマンショー的講義では生徒たちは、理解のみならず、興味と関心をひかず、聞く姿勢をせず、講義そのものが無駄になることになる。

生徒目線の獲得ならびに生徒目線からの各種の指導技術を得るには、実際の教育現場の授業を見学させていただき、授業運営手法への適宜な解説が有効な方法と考えている。その点も積極的に取り組むことを今後の課題としている。

#### 注記：

(注1) 文部科学省『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』中央教育審議会答申 2012年8月28日 13頁

(注2) 文部科学省『用語集』37頁

[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afield-file/2012/10/04/1325048\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afield-file/2012/10/04/1325048_3.pdf) 2015年7月10日

(注3) 高等学校4校25年間、大学教育では非常勤講師も含めると3校32年間、続けた教育現場経験からすると、具体的に生徒や学生のことが浮かんでくる。グループディスカッションやグループワークなどを、教育実践現場で拝見することがある。1グループが約6名で、各グループが大きな声で熱心にディスカッションを行っている。活発に行われているが、よく観察すると、大きな声で発言しているのは2～3名で、2～3名はうなずきながら聞いている。あとの1～2名はディスカッションに入れない様子、という場面を多々見てきた。

(注4) 「公民科教育法1」（3年生前期）の3年生の半期で4回の模擬授業実習を行い、翌年4年生の「教育実習」の授業において、5回目の模擬授業実習を、教育実習に行く直前に行わせ、最終点検を行わせている。ここでは、「公民科教育法」について扱っているため、4回の模擬授業実習としている。

(注5) ここでの生徒目線の生徒とは、高校生であり、思春期であり、不安定な精神状



況であることに加えて、昭和52年版、平成元年版、平成10年版と3回の学習指導要領改訂により約30年間続いた「ゆとり教育」で育った生徒、という意味も含んでいる。授業時間が半減した世代で、経験・体験が少なく、従って自信が無い世代という意味もある。

(注6) 教材研究の資料として、高校公民科の各教科書会社の各教科書、参考書、資料集、問題集などを、図書館とは別の部屋に一ヶ所に集めて陳列しており、その場所で公民科教育法履修者全員が、いつでも大量の資料をもとに教材研究に集中できるようにしている。

(注7) 30年も続いた「ゆとり教育」のためか、大量の資料を読解・解体したことがない学生がほとんどである。このため、最初の段階では、授業時間を割いて、調べ方や調べた結果、プリント作成などについて、実際に個別に指導・点検する必要がある。この個別指導によって、模擬授業実習生との信頼関係が築かれるため、真剣に各種の質問が寄せられるが、この第1段階では、簡単に分かったように思わずに、深く掘り下げて考えるように指導している。

(注8) 中学校社会科の模擬授業指導では、第1段階から、黒板に貼る用紙をはじめとして、大きな写真などを用意させる。中学校の黒板は、高校よりも板書できるスペースが少ないため、黒板の有効利用の技術を最初の段階から身につけるように訓練するが、回を重ねて楽しみながら工夫を凝らすことを期待しているため、第1段階からいきなり、高度な工夫は求めないようにしている。

(注9) 生徒の集中力は、50分どころか15分も無い。以前のテレビのコマーシャルの間隔が15分だったが、いまは10分以内になっている。このため、10分を超えたら生徒は授業内容からはぐれて、迷子になっている、と考えるのが妥当である。このことから説明の時間の基本は、一区切り10分以内にするのが妥当である。

(注10) 図解の良い点は、流れや仕組みなどがわかりやすい点だが、大きな欠点としては、生徒たちがノートに写すのに時間がかかることである。そのために、速く写し、説明を聴くことができるように、図解したプリントを配布し、穴埋めするだけの時間で済むようにしておくことが必要である。また図解は、流れや仕組みがわかりやすい反面、後々になるとわからなくなる場合が多い。そのために、図解には必ず流れや理解のための順番・番号を記入させる。

(注11) このノートには、用紙一枚に各種の記入欄があり、その記入欄を埋めていくことによって、観察の観点を身につけていくことを意図している。今回の論考には紙面の都合上、掲載していないが、今後の別の論考で扱う予定であり、観察実習ノートの

詳細をそこでは掲載する予定である。

(注12) このことは、学校教育において、授業が第一であるが、そこで全てではなく、スタートであるに過ぎないのと同じである。昨今の教育学者が授業が第一で、それで全て、というような表現をしているのを見受けられるが、学校教育現場を担任などで25年間経験している筆者にとっては、違和感を感じるところである。授業以外の生徒たちのことが極めて重要であることが具体的に想定できないとしたら、残念なことである。小中高と進級するに従って、授業外のことが極めて重要になることは、学校教育現場が長ければ長い程、痛感することである。

(注13) そのため、作業指示がほとんどない授業展開は、厳しく指摘される。生徒たちへのコミュニケーションの一つとして、作業指示法を活用することが必要なため、行っていないと、生徒たちを置き去りにして、ワンマンショー的授業運営をしていることになるからである。このようなことがはっきりした場合には、授業を途中でやめさせる場合もある。よくない癖が身についてしまうことを恐れるためと、模擬授業実習生が生徒視線を真剣にとらえ直させる必要があるからである。

## 参考文献

文部科学省『中学校学習指導要領解説・社会編（一部改訂）』日本文教出版社  
2014年

文部科学省『高等学校学習指導要領解説・公民編』教育出版社2010年

文部科学省『中学校学習指導要領解説・社会編』日本文教出版社2008年

文部科学省『高等学校学習指導要領解説・総則編』東山書房2009年

文部省『高等学校公民指導資料指導計画の作成と学習指導の工夫』海文堂1992年

森秀夫『公民科教育法改訂版』学芸図書2002年

加藤西郷・吉岡真佐樹『社会・地理・公民科教育論』高菅出版2002年

日本社会科教育学会『社会科教育事典』ぎょうせい2000年

社会認識教育学会『公民科教育』学術図書出版社1996年

社会認識教育学会『中学校社会科教育』学術図書出版社1996年

熊谷一乗『公民科教育』学文社1992年

森秀夫『中等社会諸教科教育法』学芸図書1991年

（やまおか しょうきち 本学教授）